クリスマス会を成功させた合同音楽の指導

1　中学部における音楽科の基本的立場

音楽科の学習は、音楽に触れること自体が生活に潤いを持たせ、情緒の安定を図ることにつながるものだと思う。上手にこしたことはないが、下手だからだめだというものでもないだろう。

豊かな心を育てる音楽の学習は、何といっても楽しくなければならない。技能の上達による結果より、取り組みの過程を特に大切にしていこうという姿勢が、中学部の基本的立場である。

(1)　合同音楽

中学部全生徒が取り組む合同音楽とは、各クラス音楽の練習成果を発表し合ったり、みんなでひとつの曲に取り組むなど、より大きな集団の中で協調して、楽しみながら取り組む学習である。

ここでは、各学年共通に取り上げた生活単元クリスマス会と関連をもたせた合同音楽の実践例について述べてみたい。

2　実践例――あわてんぼうのサンタクロース――

クリスマス会は、各クラスが12月の生活単元として構成し、楽しんで取り組んでいる学部の行事である。クリスマスに関係する曲は、生徒たちに親しみのあるものが多く、興味関心も深いので、クリスマス会でみんなで歌える新しい曲に取り組んではと考えた。

(1)　題材設定の理由

①　二拍子の軽快なリズムで、子どもがのりやすい。

②　歌詞がコミカルでストーリー性をもち、愉快な印象を与える曲。

(2)　学習過程と子どもの反応

①　既習のクリスマス曲を歌う
　○聖しこの夜
　○赤鼻のトナカイ

既習曲を歌う前に、各クラスのクリスマス会に向けてどんな準備をしているかを話し合った。

○クラス毎の取り組みで、自分は「何をしたか。」「何をしているか。」を発表することで、雰囲気を盛り上げることができた。

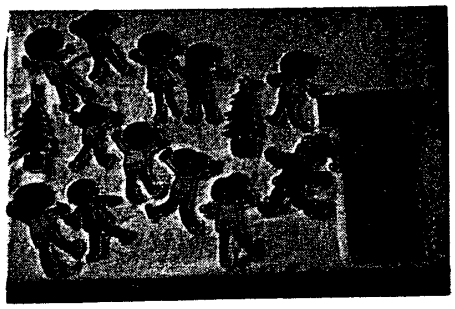
↓

②　あわてんぼうのサンタクロースの話を聞く。

歌詞にストーリー性があることから物語を編成して、絵人形を使って視覚に訴えながら話し、イメージを広げていくようにした。

1番の歌詞の話が終わると曲を流した。その後2番の歌詞・曲、3番の歌詞・曲、4番の……と5番まで進めた。

○新しい絵人形が提示されるたびに「あっ、サンタクロースだ。」「あっ、煙突だ。」などと、積極的な取り組みが見えた。



○曲が流れると「このお話の歌だ。」と、すぐ反応が返ってきた。

○２番の曲に入ると、手拍子が加わった。

○３番の話に入ったところで、「サンタクロースの袋がないよ。」という声が出た。この１つの発言がきっかけで、「本当だ。」「なんで。」と他の生徒をも一層集中させ、次の話への期待をもたせることができた。

○登場する絵人形に生徒全員の名前をつけ、話題を身近なものにし、効果をねらった。

③　あわてんぼうのサンタクロースを歌う。
○１番の示範を模倣して歌う。
○２～５番を模倣して歌う。
○１～５番まで通して歌う。

次第に雰囲気に盛り上がりを見せていたが、

○「歌おう。」という段階で、今までの盛り上がりが半減し、気が抜けたようになった。話を進める中で曲は流したが、生徒の受け止めは、話は話、歌は歌であって、「歌おう。」と構えてしまったことが失敗だったようだ。

〈反省点〉　１番の歌詞について、物語→曲の鑑賞→歌唱までもっていき、２番３番……へと順次繰り返す方がよかった。また、話の内容をよりつかませるために、次はどうなるかという予想をさせることも考えられた。それぞれの場面のポイントになることばを文字表現で残すなどの工夫が足りなかった。

④　次時予告（打楽器を加えて歌う）を聞く。

次の時間に何をするかを話して終わった。

〈反省点〉　生徒に自已評価をする時を与え、楽しかったこと、おもしろかったことを話し合って、クリスマス会に向けての意欲の持続をはかるべきであった。

３　反省と考察

(1)　視覚的に訴えてイメージを拡大することは効果的なので、今後も大いに取り入れたい。

(2)　技能の上達より楽しむ音楽を基本姿勢に実践してきて、音楽科だけによってとは思わないが、音楽の時間・音楽に関して、意欲的・積極的な言動として見られるようになった事を列挙してみると、

①　「隣の人と向かい合って歌おうよ。」　②　「前でやりたい。」　③　「～会の時に～を歌いたい。」　④　「きょうの音楽、何するの。」と朝から聞く生徒。　⑤　「～の歌のドレミを書いてください。」と頼みに来る、ピアニカに自信を持ち始めた生徒。　⑥　昨年までとは異なり、自ら自由時間にピアニカ鼓隊の練習に励んだ生徒。　⑦　堂々とみんなの前で発表するようになってきた生徒。　⑧　身体表現を自分たちで考えて作るようになってきた。

確かに、楽しむ音楽が基本姿勢であるのは大切だが、ひとりひとりの進歩を見つめる細かい配慮が必要である。

(3)　養護・訓練と音楽科からのアプローチを考え、養訓的活動を取り入れた指導を研究する必要を感じ、３学期より養訓の内容に関連づけた実践を始めたところである。　（中村　智美）